

光明 第三卷第九号

天に声あり 全て生命ある者よ 我爾に告げん「我爾を救う」と

若きその昔は働きもしたであろう。考えもあつたろう。けれど今はもう自分の身体さえ自由にならない、老衰して世の棄人にされた時、花も楽しむに足らず、蝶も目にとまらず、育てた子供にまでいらぬ者扱ひされる時、その淋しき悲しさを救う者は誰だろう。全ての希望も誇りも快樂も無くなつた消えゆく寂しみ、無常迅速の悲哀の前に、地上の全てが彼を救うことが出来ようか。大愛のみ親、呼んで曰く「我汝を救う」と。

彼は人を殺した。彼は死刑に処せらるべき身の上である。彼を、死という脅威に恐れ、恐しき罪に泣いた彼を救う道は、成功熱をあおつてやることだろうか。勤儉貯蓄を言つてやることだろうか。勉学を奨めることだろうか。何も間にあわぬ。これでも彼は救われねばならぬ。彼が救われなかつたらどうしよう。地上に住む誰一人でも彼の二の舞はせぬと誓われようぞ。彼は救はれねばならぬ。その彼を救う愛の主は誰ぞ。天に声あり「我汝を救う」と。

彼は白痴だ。狂気者だ。見ただけでも言いようのない悲しき、淋しきに胸を打たれる。全ての因果を一身に受けて、折ることも念ずることも、否人間として暮すことさえ出来ない彼が、いえいえその彼こそ第一に愛にもれてもよからうか。そうした彼の上にさえ及んでいる愛、その彼を抱いて泣いている愛の持ち主がなくてよからうか。「衆生の苦惱は我が苦惱なり」と涙の主は誰ぞ。大愛のみ親は曰く「我汝を救う」と。

若い者が、夜の間もおしんで勉強する。それもいいことだ。学資のある者、頭脳のいい者が、大きな理想を抱いて努力することもいいことだ。せつせと働いて積る財産を見て喜ぶこともいいことだ。けれど学問することも財産を殖すことも、働くことも、これ自身が決して第一義のものではない。人生の第一義は、最も急な、最も深い欲求は自分を知ることだ。自分とは何か。答えて言うだろう。人だと。人とは何か。私はしばらく「人とは何か」の問題を同胞たちに捧げよう。

迷える君！

そは積尊によつて呼ばれたる私の名である。

救わるべき者！

そは聖親鸞によつて叫ばれたる私の名である。

迷える者のなすことは、たとえ万巻の書を読もうとも、大山の如き富を積もうとも、位人臣の榮を極めようとも、「万事そらごとたわごとまこと信あることなし」である。

巡礼した鶴は、親を知らないが故に迷い、母親や弓の手にありながら親と知らないが故に泣いたのだ。全て生命ある者は、親を探ねて六道輪廻の旅に出ること、ここに幾千劫、しかして今、地上という祭壇に出でて、目に明かに見えないけれど、大愛のみ声はあざやかに「我汝を救う」と耳に入った。莊嚴に飾られたる天地の全ての恵みを受けて大愛のみ親を認識した。何といううれしい人生だろう。

悟れこの理を

学問も、富も、名巻も、全てそれは第一義ではないと言った。地上に於いて出来たそんなものが何で我が中心生命だろうぞ。

一億長者安田善次郎が兇漢のために斃れた時、そのあとに何が残ったか。一生の内五十円の寄附すらしなかつたこと、骨肉が互に食いあつたこと等、世の中の汚い悪口と、醜い死骸と、一億の財産とではないか。しかも彼を葬る為に、一坪の土があつたら上等ではないか。一億円長者に一代でなることなどどうしても立派な道ばかり行つて出来るものではない。「チュウチュウと歎き悲しむ声聞けば鼠の地獄猫の極楽」という歌のように、商人など格別に儲ける人などのしていることは、一方高く売れば、買った方はどうしても泣いているのだ。財産はこれ我がものではないのだ。世界共有の物なのだ。ただそれを一時あずかつているのだ。如何なる長者も如何なる貧しき者も、食うところは三椀、寝る所は一畳ではないか。万人の内、食う物がなくて飢え死した者があるうか。食は飢を凌げば足り、衣服は寒さを防げば満足し、住居は、雨を凌げば感謝すればいいではないか。物質に対する腹のどん底をそこにおくのだ。もし業報によつて持つべく宥されたものなれば、赦された気持ちで所有^{もつて}ゆくののだ。今の時代は物質を中心に立ててゆく世の中だ。人間の心の背骨は、愛でも信仰でも芸術でもない。ただ如何にして金を得んかが問題の中心である。けれど、そうした世界は行きづまった。皆がその苦しさを味わねばならなくなつた。そして再び生命の世界は開けて来た。「日本文化の先駆者親鸞の叫び」「日蓮と、親鸞の生命道を活かさねば、日本の今は救われない」との叫びが生れて来た。新しき時代の人間は、もう古い物質崇拜や愚にもつかない権勢欲などを中心にして動くことを恥じねばならぬ。どこまでも自己の生命が出発点でなければならぬ。敬虔に、尊い祈りに深い懺悔になくなく霊はきつと「我汝を救う」というみ親を認識することが出来る。

茨の冠

先駆者ニコライ

ロマン・ローランが書いた先駆者の中に、ベルリン大学の生物学教授として又医師として有名な、ゲー・エフ・ニコライの評論や、その思想が載せられている。ニコライは、先の欧州戦乱の時、ドイツの軍医して、最も高い地位を与えられた。彼がもし、栄達や自分の位の安全を思っている人間なら何も言わずにいたろうけれど、正義の血のあまりに鮮かな彼は、ドイツ軍の最高幹部や政治家たちの用いる所が、あまりに軍

国主義的で、あまりに人道に叛いていることに黙っていることが出来なかつた。彼はペンを取って舌をふるって、如何にドイツのしていることが恐しい罪悪であるかを公然と非難した。ドイツの洛軍や政治家たちは、憤ってニコライの高い地位を罷免して、ただの一兵卒にしてしまった。それでもまだおさまらないので、ダソチツヒの軍法会議では、彼ニコライを五ヶ月の禁固に処すべく宣告した。彼は如何なる重い刑に処せられるか知れないというので、飛行機でデンマークに逃げ去つた。「私は立派なドイツ人でなければならぬ。立派なドイツ人たらんために国を去る」とはその時のニコライの言葉であつた。ドイツがベルギーの中立をおかし、毒ガスを用い、ルシタニア号をはじめとして多くの商船を撃沈める等、如何なる暴逆も、破倫も、力は正義なりという信条のもとに、悪魔のように行つて行くのを、正義は力なりと信ずる高い理想家ニコライが黙つていられようか。これではドイツ帝国は亡ぶ！ 彼は書物に書き、大学で講義もした。政府は彼の口をあらゆる方法で封じようとした。彼はきかない。二年半も一兵卒としてつまらぬ仕事に使われたのだ。(野尻清彦氏詳)

私は彼の善悪を言うのでもない。国家と個人との關係を言うのでもない。ニコライは先駆者である。先駆者の偉大とその悲哀を味わいたいのだ。

明治維新の志士

徳川太平二百年、江戸に天下のあることを知つて、京都に天子様のあることを知らない国民の間に立つて、天子様がある！ 天皇の御政治に！ と叫んだ維新の志士は、今日の我々の恩人である。けれどその王政復古を称えた先駆者たちはどうなつたか。山県大弼も武内式部も吉田松陰先生も、迫害と死刑の淋しい一生ではなかつたか。先駆者吉田松陰先生の血を初めとして安政の大獄に繁れた幾多先駆者の血が明治の歴史の根底であることを思う時、人類始まつてこの方、真の文化を建設するために、茨の冠に、十字架に、犠牲にされた尊い先駆者たちの偉大な恩に感激せずにはおられない。

先駆者たれ

何時の時代でも、何の社会でも、国は国、村は村、時代は行き詰り、世の中が腐敗した時には、そこに先駆者が出て、異常な改造をするために、十字架を負いながら真先に進んで行かねばならぬ。吉田松陰先生は、「斯心奮発神明に誓う」と言つた。茨の冠を被らされ、十字架にかけられたキリストは、神の意志を信じた。親鸞にとつては、念仏は無碍の一道であつた。日蓮は首の座に坐つても、刀で首を切ることの出来ぬ金剛堅固の信があつた。先駆者は信仰の人である。魂のどん底に、動かぬ信と感激がある。先駆者は知識ばかりの持ち主ではない。正義のために殉じ、道のために死する信仰の持ち主である。

何時の時代でも先駆者は必要である。そして先駆者は必ず偉大である。

先駆者たれ。先駆者たれ。同胞よ！

智識が足らんといいことなけれ。先駆者の必要がないと云うことなけれ。村も町も物質を中心に立て、権力を得ることを目的とした社会は行きづまっているではないか。

平和来！

我が飯室の村に平和が来た。一村の平和は小さい事実と見てはならない。これが天下に及ぼせば、天下の平和なるゆえんである。

飯室は学校問題について争うことここに三十年であった。一校派、二校派の争いがそれである。それが九月の末たった二日をもって、解決して現在のままで真の一校となり永遠の平和が来たのである。ここ二三年学校が一校たるべきことは、一人として疑う者がなかつたのに、ただ長い争いの間に出来た種々の感情問題のために引きずられて度々の解決を企てた者に空しく手をひかせたのである。解決の根本動力は何か。私は答えて、若き者の奮起にあると言おう。

村内に散らばる若き目覚めたる小さき先駆者たちは、一校二校の党派を眼中におかず、一村の平和を目標に、種々な批難と攻撃とを甘んじて受けながら、目覚めざる民衆の先頭に立つて、あるいは説き、あるいは計り、ついに飯室の維新の機運を造つたのである。保守派即ち戦闘派たちが、一校派は城によつて一校を守り、二校派の勢衰えて自然消滅の時を待ち、二校派は捲土重来一校派の城郭を攻落すことを目的としている間、城を毀ちて、教育の尊重を説き、愛の村を招来さすために、出て来たのは主として青年をもつてなされた進歩派であつた。彼等小さき先駆者が、幾度か手を焼き、異端者として問者として苦しい立場の中にありながら、ついにその目的を実現したことを感謝し讃美するのである。

平和来！ 平和来！ と叫ばれた夜、飯室村の万歳の三唱せられた時、ここ数年苦しんでの素志を貫徹した人たちの眼中には、ただ無言の涙があふれていた。

戦に乗じて、愚な民衆を煽つて自己の権力欲を満足していた人たちは、自己の立場を失つてしまった。平和を好まぬ極少数の人たちの如きは如何なる死物狂いをしようとも、遠からず社会的に葬り去られる人である。今や賢明なる議員諸君の努力によつて校舎の増築、運動場の拡張、校舎の移転などは決議せられたのである。

私は若き先駆者に满腔の誠意を以つて感謝の意を表するのである。

天下暗澹として妖雲たなびく

世界的に人の心は荒み、信仰をかき、道徳は守られず、金を得ることのみ心を使つて、百鬼夜行の有様ではないか。身は高官に居れども、心高官におらず、身は家族に居れども心は匹夫におとる者、世に大道闊歩しているというではないか。代議政治の神聖が何処にあるうか。今の道徳を救い政治を救うためには、正義の血潮高鳴る先駆者が必要である。先駆者となれ。しからずば、先駆者を生むために、偉大なる先駆者を生むために、飢え渴く如く義を求める清き民衆となれ。清き熱烈なる民衆によつて先駆者は生れ、先駆者によつて汚れたる民衆は救われる。

全てを善意に

疑えば皆チボ

大阪駅にスーッと汽車が入った。私も急いで乗った。車中がやつと落ち着いた頃に、車掌が「皆様チボに御用心を願います」と言つて通った。静かになつた乗客は急に眼を見はつた。そしてこの車中にもチボがいるかのように疑い深い用心をしはじめた。

時計・財布と手をあてて見たり、よくしまつたりした。私は人の心の動きをじつと眺めていた。すると五十ばかりの太つた男が、「チボの奴はたいがい神士らしく化けていて、洋服でも着て……」と車中を通るような声でどなつた。群衆たちは、そうだと云わんばかりに賛成の顔色を見せた。そして洋服を着た人を一人づつ異様な目つきで見渡しはじめた。私の上にも、恐ろしい眼が前後から向けられている。冷たい空気が、人間たち皆が疑いあつた恐しい空気が堪えがたく不快であつた。けれど汽車が神戸に着かない内に大概は眠つてしまった。私の前に眠つていた三十歳位の商人らしい男もちよつと眼が覚めるとすぐ腰の財布に手をかけて見た。汽車は、ただ闇の中を走る。

利己主義の上に立てば

利己主義を、自分の中心に立てて考えると、一切の人はみな自分の敵に見える。他人もまた自分のように自分勝手の利己主義で動いているように見える。

天の理に曇りは無く、人の心に疑いあり

太陽の光が、雲の有無にかかわらず常に明かな如く、天の理に曇りは無い。天地一貫、古今不変、宇宙の真理に動きはない。誠はこれ、神明を貫く、無碍の光明である。信心！ 信心！ 信心とは、不浄な、変わり易い人間心ではない。絶対無限の、天地一貫の生命が、人間心の中に徹底したのである。信心とはまことのこころである。信ずる心である。疑う心は、これ人間の有つ醜い心である。信の心は天地古今を隈なく照らして及ばぬところはない。人の心にのみ、疑いの雲がある。

若き者の祝福は

若き者の祝福は、数限り無く多いのだらうけれど、若き者のもつ一つの美しさは、「理解を有つ」ことである。理解を有つとは、信まことの心の早わかりである。深く疑い得ない心である。よしたとえ、深く疑い得ない心のために、幾度か心の直からざる者のために欺かれようとも、そのために、陥入れられて無惨な損害をば受けようとも、神の審判の前に立つた時は、その正しさを褒めらるべき者である。若き日の生命は、全てに対して理解を持つが故に、心の傷のために、他人を見れば盗賊と見よと言う老いたる生命よりも、祝福さるべき者である。

火のない所に煙は立たぬと言うけれど、煙だと思つたことがすぐ火のある証拠ではない。人間の目は霧を煙とも、砂煙を煙とも見誤り、時には何も無い所にさえ煙を見とめるのである。況んや心の眼で見る無形の煙をやである。

何事も善意に解釈することです。その人と自分との立場を換えて考えることではありません。理窟はどうでも言えるでしょう。けれど理窟通りにはしよせん行かれない私たちです。

彼を悪人だと言う前にも、今一通り同情をもつて考えて見ることです。人は皆自分の性格によつて行いが出て来るのです。理窟から言えば、悪いとは知りながらも、強い深い自分の内から湧く力によつて出来た悪かもしれません。何という私の性格だろうと泣いているかも知れません。私は私の性格の弱さに泣き、人は人で自分の性格の醜さについて泣き、そしてお互に人のことには善意をもつて宥し、宥されて生きてゆくことが淋しい者の集まつたこの世界での生き方です。私たちが宥し信じあう所には、友人も親子も兄弟も皆善人です、疑う所、呪う所、そこには悪人ばかり出来るでしょう。他人を信じ他人のしたことを善意に解釈することは、その人の魂が美しいからです。たとえ相手がほんとに悪人であろうとも、信ずる心の持主は清い尊い方なのです。

もし自分の心の汚れから、他人を疑つて、悪いとか畜生だとか言つた後、その人が心の清い方であつたら何としましょう。大石良雄を獣だと言つて罵つた烈士喜剣は、良雄の忠義を知つた時、切腹して地下に言いわけしましたけれど、こんな強い事の出来ない私たちは、疑つた方に何と言つてわびましょう。その人の名誉をどうして取り返えしましょう。善意に人を見る人は、一度や二度馬鹿な目を見たとても、魂の清き者は、三千世界の諸仏諸神によつて守られ、私の新しく出来る運命の上に、祝福が加えられます。

虚栄の悪魔

若い女の言分

若い年ごろの女の大抵は「百姓は嫌いです」と自慢そうに言っている。この一言でだいたい今の時代が知られてくる。この一口にどんな悪魔が入っているかを考えて下さい。

女たちの心の中で、表面の理由は何であっても、言うでしょう。

「体が辛いから……。」

「勉強しても、何の役にも立たぬから……。」

「虚栄が満足されないから。」

「奇麗にしていられないから。」

あさはかな、この心の底よ！ 人間の求めている幸福、真の幸福は、そんなところには無いぞ。体が辛い……それは怠けたいからだ。勉強は鼻の先にぶら下げる為ではないぞ。結婚は虚栄満足のためではないぞ。皆悪魔の声だ。あなたの腹の中に

巢くう悪魔の声だ。あなたはお茶も習つたろう。お花も知つていよう。高等女学校も卒業したでしょう。けれどそのために、百姓の妻になった時、木樵りの妻になった時、そして全てあなたが見て以つて賤しとし、嫌だと思ふ職業を持つてゐる男の妻となつた時、教育のない女たちよりも、妻としてのあなたが立派でないならば、私はあなたの受けた教育を疑います。教育は、人間的活動の根本的知識を得る手段であり、人格を造る方法です。もし教育が世のいわゆる奥様を造ることにあるならば、教育は受けなくてもいいと思ひます。教育は労働を厭ふことを教えたでしょう。虚偽の幸福を求めることを教えたでしょう。虚栄のあなたを目的としたでしょう。

もしあなたに眞の教育があるならば、貧しき者を富ませ、愛に飢えた者を飽かせ、悲しき者を救ひ、悪しき者を善に移らせる力があるはずです。乃木將軍の夫人静子様のように、木村重成の妻のように、北政所のように、鮑宣の妻少君のように、あなたの生命がほんとうの教育を受けてゐるならば、あなたは、ほんとうの愛の体験者として生きねばなりません。でないならば、あなたの受けた教育は、あなたの運命を正しく育てないで、悪魔の呪いがひそんでゐます。今の内に悪魔を見出した方は、追ひ払いなさい。悪魔のいる間、たとえあなたのお顔が美しく、財産も学問も地位もある人の所に嫁入つても、あなたの幸福はありません。悪魔を追出して、赤裸々なあなたにおなりなさい。愛を根本に立てた生活、犠牲を出発点にしたあなたの生活のみが、ほんとうの生活です。時によつたら、タンスの着物一枚残らず売つても、心から感謝し、病める夫と、若き子を育てるためには、帯紐とかず、夜を昼に継いで働くことさえ心から有難いと思ふあなたが見出せた時、あなたはほんとうの幸福者でございます。

悪い夢

虚栄という悪魔は女子ばかりの持ち物ではない。もし人生から虚栄の悪魔を追ひ出したら如何に真面目なものになるだろう。

金持になりたい、学者になりたい、高官になりたい、それ等がもし自分の虚栄欲を、滞足したのであるならば、学者になつたことに、高官になつたことに、金満家になつたことに、どれだけの価値があろうぞ。そうでないと言ふことをやめよ。米国に渡つて金をつかんで来た者が日本に帰つて何を第一にするか。善美をつくした宴会、金に飽かした普請がその仕事の全部ではないか。金の波が、社会をうづまく時、天下の青年はどこに走つたか。中学卒業者の志望は実業界に集つたではないか。

金持ちらしい風、賢そうな風、信仰家らしい風、道徳家らしい風、「らしい風」をしてゐる者があまりに多い。私もまたその一人だと思ふ時、堪え難い淋しい心になつてしまふ。無い袖を振つて見たい私たち、腐れた心に蓋をして一時でも過したい、人に知られないようにゴマ化そうと思ふ私たちの生活は、見つめれば見つめるだけ、どんなに悲しい一生でしょうか。

ある所に昔から床屋を勤めた金満家がありました。三四年前から大普請が始まつて、それはそれは大きな家が出来ました。ところが近頃になつて急に、土蔵を売り、造作のまだ整はぬ家をも売りに出して、家を畳んで、広島に出られました。人々は口々に笑いました。けれど私は、その御主人に感心しました。人の話では、数万とい

う負債が出来たとか、それも御主人の計画的な外れになったものが原因なのです。普請を始められた時には、もちろんそんな事情はなかったのに途中から出来た事です。そんな負債の出来た時、一時の虚栄のために、小細工をするかわりに、思い切つて他人の批評も何も気におかないで、あんな処置をお取りになったことを誠に賢明な仕方だと思えます。笑っている人たちが賢いでしょうか。笑われる者が優れているのでしょうか。

虚栄のために、百円の借金で、ゴマ化しついでには二百円、三百円、そしてとうとうどうにも出来なくなるのだ。しかもその間、悪い夢に襲われたように苦しまねばなりません。きつと身を亡ぼす者は、虚栄という悪魔につかれた人たちです。濃化粧に自分の美しさを誇ろうとする女に、何で生命の光が見出せましょう。金で買った位や袈裟を誇ろうとする僧侶に、何で仏の愛が知れましょう。

物置の大掃除

運動会の為に物置が乱れて汚くなりました。埃と反古と炭と木切と机と種々な道具で足を入れるところもないほど穢くなっていました。子供たちが一切中にあるものを取り出して、塵や埃を集めて出したら、小山のようになりました。それには火をつけて焼き、中に入れる物は整然と詰めたので、半日、時間はかかりましたが、気持ちいい物置になりました。人の心もこの通りだと私ほつくづく感じました。室の外から見た時、その室内の汚れは見えて来ません。掃除は室の外の壁を美しく飾ることでしょいか。内の汚れを除くことでしょいか。たとえ外は如何に美しくてもその中が乱れている時、私たちは満足出来るでしょいか。馬鹿げたほど単純な私の譬です。けれど、私たちの実際を見つめる時「汚れたる物置」の名がふさわしいではありませんか。我を忘れて、来る日来る日を暮している時、私たちはただ壁を美しく塗りかえることにのみ心を奪われて、汚れた心の中をのぞき、室の中を整理することを忘れてはいませんか。美しく見える客間でも、額の裏をご覧下さい。畳の下をぐらぐら下さい。きつと汚れているでしょいか。心の掃除をせねばなりません。八万四千の組虫をうようよとわかしている心の中を、虚栄の衣服と顔色と言葉とをもつて包み、その上に紅白粉をつけて得々としているのが私たちではありませんか。

孔という孔、口と言わず目と言わず、全ての孔から言いようのない臭気を出しているとは何という醜さでございませうか。孔からは蛆がはい出しても、どうにか胡麻化して行かうとする人たちの内で、私はその心の大掃除をなさるあなたの生活の幸福が思われます。あなたのお顔の墨が見えないように、心の墨も見えにくい。あなたの生命を洗わんがために、光明のお指揮によつて、そして世の中の多くの目覚めたる方によつて、あなたの生命の掃除をお励み下さいませ。

苦しいけれど離れて見よう

虚栄の欲は私たちの魂に強い悪魔として食い入って、追出すことは困難です。けれど私たちの苦しみは、この悪魔のためなのです。この悪魔に忠実にしている間、私の魂は苦しまねばなりません。そして階段を上るように、段々と物足りなさ、罪悪と

が増して行きます。とうとう私が腐れ果てた時、悪魔は凄い笑顔をつくります。私たちがもし離れにくい悪魔を追い出して、真実の私になった時、そこには、醜い、臭気の鼻をつく私を赤裸々に見て泣く涙の私が見出せるでしょう。その時、新生の誕生です。

巻末に

毎巻色々な事情の為に配本が後れて皆様に申しわけがありません、けれども私が衷心に於いては、決して皆様の御期待にそむかないようにとの決心がございます。有縁の精神的同情が毎日下さる御言葉に対して心からの感激をもつてペンを取っております。書いてあることについて又皆様の日常について、色々な不審や、疑いがありましたらお出し下さいませ。誌上ででも、私信でも御答えいたします。

同胞談話室の御利用を願います。原稿がさっぱり出ません。手短かに成るべく多数お出し下さい。

光明団は営利の目的でもなければ、売名の団体でもありませんから、一概に大きくなることも必要ですけれど、私の言うことに共鳴して下さる方は、そして真に信仰に入って下さる方は一人でもほしいと思います。月々の光明はなるべく多数の人に
お見せ下さい。

秋深く虫の音もうすれ、紅葉色づく頃となりました。物悲しい人の懐しいこの頃、ほんとにあなたの生命の永遠への誕生のために、静かに黙想し、救われた感謝にあなたを捧げて新しい活動にお入り下さいませ。